

歴史サロン花畑「歴史講座」

- 1 演題 熊本市の原点、熊本城下町 ～清正期から熊本市の成立まで～
- 2 講師 松崎範子（肥後医育ミュージアム研究員）
- 3 日程 令和4年12月1日（木） 午後2時～3時30分
- 4 場所 桜の馬場城彩苑2階 多目的交流室

【講演録】

I. 城下町の形成

明治21年（1888年）に明治政府の下で市町村制が交付され、翌年明治22年（1889年）4月に熊本市が成立しました。絵図を見比べると、江戸時代の城下町がそのまま明治22年の熊本市になっていることがわかります。そしてその明治22年の市域は、加藤家時代の城下町の絵図と比べても実はエリアは大差がありません。

加藤清正が肥後国半分の領主だった時代、やってきた当初のお城は「古城」にありました。やがて肥後一国の領主となった清正は政治の拠点として熊本城を建設します。領地を治めるために城の周りに家臣を集め、その武士の消費生活を支えるために商人や職人を住まわせ、城下町を形成しました。これが熊本市の原点となるのです。

II. 熊本藩の拠点としての城下町

城下町の住人は武士と町人です。城下町は藩の政治と経済の中心地という役割があり、農村とは区別をされました。また江戸期は身分によって住む場所が決まっていた時代であり、同じ城下町の住人であっても武士と町人では生活する区域の管轄は別になっていました。

町人が主に住んだところは古町、新町、京町、坪井町の4地区です。古町は古城時代から町人町として形成された地区でしたが、城下町拡大時に移行地区となった新町には武家屋敷が点々と残っていました。京町・坪井町は豊前・豊後街道沿いに町人が住むようになった地区で、同様に町人と武家屋敷とが混住していました。

住民が混在する城下町で、身分制度に基づきそれぞれを治めるルールがどのように出来上がっていったかは、宝暦の改革以降の行政システムの細分化過程を見るとよくわかります。宝暦改革というのは、熊本藩主細川重賢の時代——1750年代を中心に行われた藩政改革です。全国でも江戸中期藩政改革の成功例とされていて、刑法叢書の作成によって法律が整備され、藩校の時習館（教育施設）・再春館（藩の医学校）が設立され、行財政改革を行うための藩の役所の整備が行われ奉行所機構が出来上がりました。

奉行所のあった奉行丸は、現在桜の馬場城彩苑上の高台、大手門外の城内に入らずに行けるところにありました。藩の政治の一番上層機関、財務や刑法等の部局から各郡部担当の職員詰所のようなところまでが、ひとつの建物に集まっていました。つまりなにか必要なことがあれば奉行所の中ですぐ相談ができる、そのような政治の仕方、役所の仕事が江戸期の中期以降は行われるようになっていたということです。また、城下、川尻・高橋・鶴崎、各郡部に各部局の出先機関が数多くあり、それらの中心に奉行所があって中央行政機関と言われる機能を果たしていました。

Ⅲ. 城下町に生きる人々

絵図は作成目的により、書かれた情報が違います。藩の屋敷方が作成した武家の絵図は、藩が武家屋敷の広さと居住者を把握するのが目的ですので、町の情報は入っていません。何石以上は何坪という決まりがあったため、上級武士の屋敷は坪数まで書いてあるところもある一方、下級武士に個々の記載はありません。町人が居住しているところも「町」と書いてあるだけです。また異なる年代の絵図を見比べてみると、屋敷地が城下の中を転々としている家が結構あることがわかります。元々の石高に加えて、仕事を頑張って足高によって石高が増えた人たちが、その基準に合わせて広い屋敷をもらえるので転々とすることになるのです。

同じ城下町でも、町の絵図は町役人といわれる町人の中から選ばれた人が作成しました。町人の絵図にとっては、武士は住んでいる場所が大体把握できれば良いので「御家中」とだけ書いてあります。町人が住んでいるところの情報はとても詳しく、間口、奥行き、店名と住人の名前が書いてあります。それは商人や職人など住民を把握する目的のほか、間口が徴収金の負担基準となっていたためでした。農村で農民が領主に年貢を納めるのと同じように、町の場合は諸費用を町役人が徴収して城下町の維持に使われました。

江戸期の町は道の両側に形成された両側町という形をとります。この町をいくつかまとめた懸は、村にとっての手永と同じです。各々の町で庄屋に匹敵する町頭という担当者ができる、それを束ねる懸には別当という町役人が決まります。村の場合はさらにその上に郡代がいて藩の機構に入っていくのですが、町の場合、特に熊本城下町のような人口の多いところは、懸の別当の代表が集まって熊本町全体の会議や話し合いをしていました。その機構を惣町と言います。その惣町が集まったところを熊本惣町会所と言いました。新町にありました。

町人の世界にも、町の人々がまとまるように、または藩の指示に従ったり、藩に自分たちの要望を伝えたりして自分たちの生活を守るような組織や仕組みがあったわけです。

4. 城下町から熊本市へ

熊本は日本で初めて公立の医学校が作られた場所と言われています。幕府医学校より早く、宝暦の改革により作られた再春館は、身分に関わらず医師を育てようとしたところでした。そして再春館の機構を見ると、教育機関としての顔のほかに、伝染病対策などの通達を隔々まで行き渡らせ、日々の医療活動が適切に行われているかを監督する役割も持っていました。その再春館の通達にも見えるように、時代が進むにつれ様々な仕組みの整備が必要になって、実際の業務がやりやすい形が後からできていきました。

市制施行された明治22年の熊本市と、加藤清正が江戸期に作った熊本城下町の面積はほとんど一緒です。しかし人の行き来や物流が増え、生活も豊かになり、そのために町人の数、店の数も増え、城下町は大名の政治の拠点から経済の中心地として広がっていきました。また全国的に見ても、大きな藩は大体において城下町のあった場所が県庁所在地になっています。それはつまり石高制・年貢制・身分制という江戸期の原則、身分制度による住民編成を乗り越えた機能や仕組みが準備されていたのだということが見て取れるかと思えます。